

母子のくすぐり遊びにおける身体性を基盤とした意図理解

—原三項関係の探究—

Understanding intention based on inter-body relationship of mother and infant in tickling play: from the viewpoint of proto-triadic relationship

石島 このみ (Konomi Ishijima) 指導：根ヶ山 光一

—研究1 横断的アプローチ—

【問題と目的】くすぐりは、身体接触を伴う母子の基本的で重要な関わり合いの一つである。しかしこれまでくすぐりを扱った研究は非常に少なく、それが持つ重要性にふさわしい検討がなされてきたとは言い難い。特に、強いくすぐったさの生起は乳児による意図理解の成立を示唆する(根ヶ山・山口, 2005)とされながらも、その実証的な検討はなされてこなかった。そこで本研究は、母子のくすぐりにおいて乳児による意図理解がなされている可能性とその発達について、横断的に検討する。

【方法】生後約5ヶ月～7ヶ月(mean=6.34, SD=1.07)の乳児とその母親、合計20組を対象として、東京都の子育て支援施設にて、各組10～15分間の遊びの観察を行い、その間に自由にくすぐり遊びをするよう依頼した。全映像からくすぐり遊び場面を抽出して分析対象とした。なお、従来の意図理解研究が視覚を指標としたものに偏重していたことに鑑み、本研究は Communicative Musicality (Malloch & Trevarthen, 2009) の観点を導入し、異なる感覚モダリティにまたがる“テンポ”に注目しながら、各行動の同期性・非同期性やナラティブ(文脈)について分析を行った。

【結果と考察】全体を低月齢群と高月齢群に分類して比較したところ、高月齢群において有意に強いくすぐったさが発生しており($p<.05$, 正確確率検定)、また文脈を提供するようなくすぐり方(「くすぐりの遅延化」や「歌遊び」)がなされていた母子ほど、強いくすぐったさが生起していた($p<.05$, 正確確率検定)。乳児の視線の対象としては、くすぐったさの有無に拘わらず「周囲」の生起率が高く、視覚的な注意が外周へと拡散してしまっていた可能性が指摘された。さらに、くすぐったさが発生していた母子1事例についてのマイクロ分析を行った結果、やりとり「導入期」、「調律・発展期」、「クライマックス」、「収束期」という明確な文脈が見出され、それに則して互いに行動をマルチモーダルに調律している様相が示された。これにより、母子間においてくすぐり刺激の背後にある、「くすぐったさ」を対象とした共同注意がなされている可能性が示唆された。

—研究2 縦断的アプローチ—

【問題と目的】研究1における生態学的妥当性の欠損の可能性を考慮し、研究2ではより自然な家庭場面でのくすぐり遊びの発達について縦断的な観察を行い、乳児の意図理解がなされている可能性について、改めて検討する。

【方法】観察開始時生後約5ヶ月の乳児とその母親一組を対象として、家庭において2時間の自然観察を行い、その間に自由にくすぐり遊びをするよう依頼した。分析の手続きは研究1と同様であった。

【結果と考察】子どもの視線の方向の時系列的な変化に着目してマイクロ分析を行った結果、生後6ヶ月2週の時点で、母親がくすぐりを遅延させた際、子どもに予期的なくすぐったさが発現し、さらにくすぐり刺激源と母親の顔に対する視線の反復的な交替が起きていたことがわかった。また視線の反復的交替の生起頻度は、発達の増加していた。このことから、母親の身体の一部であるくすぐり刺激源(多くは手)やくすぐられる自分の身体部位、そしてその背後にある「くすぐったさ」を対象とし、身体感覚を基盤とした、意図共有的な共同注意現象が起きている可能性が示唆された。

従来、共同注意現象は「乳児—モノ—他者」という独立した三項により説明がなされてきた。しかし、二項関係と三項関係をカテゴリーカルに区分するのではなく、母子の身体性を視野に入れると、身体を媒介項とした新たな構造が立ち現れる。これは、その発現時期や行動パターンから、「原三項関係」と言うべき原初的な共同注意である。このような身体性をベースとした共同注意が、三項関係における意図共有的な共同注意の先駆けとして母子間に起こっていると考えられる。さらにその体験は、二項関係から三項関係における共同注意への移行を支え、積極的に促進するような役割を担っていると推察される。